西夏『雑字』研究

目次

前言・序

西夏は、わが国の北宋の時代，タングート羌を主体とし，寧夏を中心として建てられた王朝であり，国名を、大夏、白高国、大白高国あるいは白高大夏国と称していた。外国人からはタングート(Tangut)と呼ばれている。国都を興慶府（現在の寧夏回族自治区銀川市）にさだめ，元昊(げんこう)－諒祚(りょうそ)－秉常(へいじょう) －乾順(けんじゅん) －仁孝(じんこう)－純祐(じゅんゆう) －安全(あんぜん)－遵〇(じゅんぎょく)－徳旺(とくおう)－〇(けん)という10代の王が即位し、190年のあいだ(1035-1227) 続いた。もし『宋史』に記述されている「いまだ国と称せざるも其の土(ち) に王たり」という記載によって、夏州政権から数えれば、347年間(881-1227)に及び，この年月は、北宋(960-1127)と南宋(1127-1297)とを合わせた期間より、さらに27年長いものである。西夏が統治した地区は，現在の寧夏のほか，陝西、甘粛、内蒙古の一部を含み，最強時の勢力は、現在の青海省西寧、新疆ウイグル自治区ハミ一帯にまで拡大していた。西夏は、前後して、宋、遼、金と鼎立し，一方の雄を称えていた。ジンギス汗が破竹の勢いでホラズム（現在の中央アジアのイラン、アフガニスタン一帯）を攻め，コーカサス山脈を越え，ドン河流域に進み，ボルガ河を占拠し，その勢力はヨーロッパ・アジアを震撼させたが，ジンギス汗の西夏征服は「向かうところ敵なく，戦えば必ず勝つ」とはゆかずに，前後あわせて５回の出兵で、ようやく西夏国を滅ぼしたのであった。蒙古兵は復讐に燃え，西夏の文化に容赦のない破壊を行った。王陵を焼きつくし，文物を壊しつくし，西夏の民は四方に逃げのびていった。元代には宋、遼、金の三史が編纂されたが，ただ西夏史だけは編纂されず，このため、西夏は、わが国の「シルクロードの謎の王国」となったのである。

１．西夏文『雑字』の来歴と版本

西夏人が創り出した多彩な西夏文化は、西夏の滅亡とともに、跡形もなく消え去ったといってよい。「元昊，自ら蕃書を制し，野利仁栄に命じて、これを演繹せしめ，十二巻と成す。字は、形体，方整にして、八分に類すれど，画くに頗る重複あり」①。ここでいう「蕃書」は「天書」となり，西夏人が甘粛省武威に建造した「重修凉州擁国寺感應塔碑」も封印され，1804年になって、はじめて、わが国の著名な学者の張〇が封をひらいて、西夏碑文であることを発見したのであった②。しかし，この重要な発見は、広く知られることはなかっ

た。1870年には、西洋人のワイリーが、最初に、居庸関六体碑文を紹介したのではあったが，そのなかのひとつが西夏文であることがわからずに、誤って「女真小字」であるとかんがえてしまった。③1898年には、ドゥベリアが「感應塔碑」を研究したとき，ようやく張〇と同じ結論を得て，④ついに「天書」の謎があっさりと氷解したのである。しかし、西夏文字の解読の研究には、考古学の発掘の助けを借りなければならなかった。

1908年３月、ロシアのコズロフは、わが国のカラホト故城を「探検」しにやってきた。1909年５月、チベットからカラホトに廻り，そこでひとつの古い墓を掘ったが，その墓は「探検隊に大量の宝物をもたらし，各種の書籍，巻物，写本を所蔵する完全な書庫であった」。⑤「書庫」には西夏文字や漢字で書かれた大量の仏典のほかに，西夏人が自ら編んだ辞書や字典，例えば『文海』『同音』『番漢合時掌中珠』などがあり，西夏文刊本『雑字』もそのひとつであった。

ゴルバチョワとクチャーノフ共編の『西夏文写本と刊本』⑥ではつぎのように紹介してある。カラホト出土の西夏文『雑字』には２種類ある。ひとつは刊本であり、４種の版本がある。クチャーノフ寄贈の西夏文『雑字』（整理番号 210）がほぼ完全にととのって残り、「保存良好」であるほか，その他は１頁、２頁の残片に過ぎず，最も多いものでも「14面の残頁」で「保存最悪」である。いまひとつは写本であって、２種類ある。ひとつは、書名はないが、内容から判断し「雑字」とするが，その本の最初の１頁と最後の１頁だけは印刷で，合計20面よりなる。もうひとつの写本は、『三才雑字』とあり，全書62面のうち26面が残っている。以上の紹介から，クチャーノフ氏寄贈の『雑字』が，カラホトで出土した『雑字』のなかで、最も完全で、保存も最良であることがわかる。

この整理番号 210の『雑字』は，１－３頁、４頁の第１面、19頁の第２面を欠くだけである。ソ連の学者の整理では、４頁の第２面を１頁とし，19頁の第１面まで合計30頁としている。筆者は本書を研究するなかで，１頁の下半分は、30頁の下半分に他ならないこと，そして、その版心には「九」の字の右半分があり，さらに９頁を調べると「九」の字は完全に残っているので，右半分の「九」の上には「十」の字が削られ，本当は「十九」頁とすべきであることを発見した。この発見は、17頁と18頁の版心に頁の数字が欠けているのであって、文字が欠けているのではないことの証明となる。これで４頁の第２面から19頁の第１面まで欠落がないことになる。現存する『雑字』の内容は26部で，その配列は以下のとおりである。

１天河部，

2 地部，
3 山部，
4 河海部，
5 宝部，
6 絲部，
7 男服部，
8 女服部，
9 木部，
10 菜部，
11 草部，
12 穀部，
13 馬部，
14 駱駝部，
15 牛部，
16 羊部，
17 飛禽部，
18 野獣部，
19 昆虫爬虫部，
20 番族部，
21 人名部，
22 漢族姓部，
23 親族称謂関係⑦，
24 身体部，
25 屋舎部，
26 飲食器具部。

この『雑字』と同時に出土したものに，西夏漢文写本『雑字』がある。整理番号ДＸ－2825，胡蝶装丁，現存するのは36面。20部に分類され，その配列は以下のとおりである。

漢姓第二（残頁），
番姓名第二，
衣物部第三，
斛〇部第四，
果子部第五，
農田部第六，
諸匠部第七，

身体部第八，
音楽部第九，
薬物部第十，
器用物部第十一，
居舎部第十二，
論語部第十三，
禽獣部第第十四，
礼楽部第十五，
顔色部第十六，
官位部第十七，
司分部第十八，
地分部第十九，
親戚長幼第二十。⑧

〔原注〕
①『宋史』巻 485，中華書局版，13995 頁。
②張○「書西夏天祐民安碑後」，『養素堂文集』巻19，1837年。
③ A.Wylia, On an Ancient Buddhist Inscription at Keu-Yung-Kwan,Journal of the Royal Asiatic Society, 1870。
④省略
⑤省略
⑥省略
⑦原文は直訳すると「節親異雑義合和」となる。ここでは意訳して「親属称謂関係」となる。注目すべきことは，それがその他の各部と異なり，漢族姓と身体部の間に置かれていることである。「節親」は「輩○」とも訳せる。
⑧史金波「西夏漢文本『雑字』初探」，『中国民族史研究』第２輯 所収,1989年,168頁。

２．西夏文『雑字』と漢文本『雑字』との比較

西夏文『雑字』と漢文写本『雑字』とは、同時に，同じ場所で出土し，名称も同じ，形式も同じであるのだが，その編集体裁や内容配列はかなり異なり，その相違は以下の点である。

（１）編集体裁の相違

西夏文『雑字』は三才を綱領としている。一品天才には，わずか天河部しか残っていないが，別の種類の『雑字』の一品天才には「閃」「霹」「雲」「雪」「雹」「霜」「露」「風」「天河」の各部がある。二品地才には「地」「山」「河」「海」「宝」「絲」「男服」「女服」「木」「菜」「草」「穀（糧）」「馬」「駱駝」「牛」「羊」「飛禽」「野獣」「昆虫爬虫」の各部がある。三品人才には「番族姓」「人名」「漢族姓」「親族称謂関係」「身体」「屋舎」「飲食器具」の各部がある。編集はよく考えられ，順序は整然としている。一方，漢文本『雑字』では、１－２部は「族姓」，３－５部は「衣物，斛○，果子」，６－９部は「農田，諸匠，身体，音楽」，10－12部は「薬物，器物，居舎」，13－16部は「論語，禽獣，礼楽，顔色」，17－20部は「官位，司分，地分，親戚長幼」となっている。「禽獣」を「論語」と「礼楽」の間におき，「官位」や「司分」の上位においている。また「官位」のなかに“皇帝、皇后、皇子、皇母、太后，后妃・・・ ”などがある。「司分」のなかには“朝廷、中書、密院、経略、中興、御史”などの中央や地方の政権機構がある。前言も跋文もないので編者の意図は分からないが，まとまりがなく雑然とした感じを受ける。分類が難しく、「おおよそ帰納すると、民族姓氏、生活用品、身体衛生、生産活動、文化生活、政治生活などいくつかの方面になる」①とするしかない。

（２）編集内容の相違

西夏文『雑字』と漢文本『雑字』とは、本来なら、大きな相違があってはならないことになる。ところが、両者の相違は甚だしく，編集体裁が全く異なることのほかに，内容の配列でも異なり，それぞれ比較すると以下のようになる。

1)２種類の『雑字』は、どちらも「番姓」を収めるが，漢文本『雑字』はわずか60姓を収めるだけだが，西夏文『雑字』は 250姓を収め，漢文本『雑字』より 190姓多く，70の番人名があり，これは漢文本『雑字』の４倍以上の多さである。また、漢文本『雑字』のなかには、“回○”“庄浪”の姓があるが，前者は回鶻（ウイグル）の別称で，後者は吐蕃（チベット）の一派であって、居住地から命名され，かれらはタングート人ではなく，番姓名に入るべきではない。

2)親族称謂関係は、民族の社会的性質や風俗習慣を研究するのに重要な価値がある。２種類の『雑字』はそのような内容であるが，漢文本『雑字』はわずか19字しかないのに比べ，西夏文『雑字』には 340字ある。内容はかなり豊富で多くの問題を反映している。漢文本『雑字』のはじめが“口口、娘娘、父母、兄弟・・・”であるのに対し，西夏文『雑字』は“祖父、祖舅、伯父、伯母、父親、母親・・・”とあり，両者の差異はあきらかである。

3)「身体」部は、２種類の『雑字』とも単独で一部をなしているが，漢文本『雑字』はわずか56字であるのに対し，西夏文『雑字』は 154字を収め，身体各部位の名称に対しては基本的にすべてを収められている。なかには、用法が巧妙で、判読しがたい言葉もある。たとえば“木梳”という語は，本来、婦人が髪を梳かすときに使うものなのに「身体」部に置かれ，しかも２番目の位置にきている。これは、作者がおき違えたのではなく，“木梳”という語が身体の重要な名称であり，もしも、この語を考証することができれば、西夏の言語と文字の研究に貢献できることはまちがいない。また，“下巴”“肩膀”“頭骨”“骨髄”“膏脂”“脂肪”“精液”など，どれも参照すべき資料がなく，筆者が前後の文脈の関係とその字の構成要素から訳出していて、ひょっとして誤りとなっているかもしれない。しかし、この部分は、たしかに、新語が少なからずあり，なお研究する価値がある。

4)「屋舎」部も２種類の『雑字』でともに単独で一部をなしている。漢文本『雑字』が 114字収めているが，もし“一片、一課、一粒、一○、一把、一个、一束、一軸、一副、一隊、一群、一盞、一瓶、一盤”など14の“一”の字と“房子”の重複を削ると実際は98字に過ぎない。漢文本『雑字』の字数が比較的少数であろうとも，２種類の『雑字』の最初３行には相似点がある。比較すると以下のようになる。

漢文本『雑字』	正堂	○○	挾舎	散舎	房子
	房子	厨舎	横廊	基階	門楼
	亭子	攝集	草舎	客庁	草庵
西夏文『雑字』	房屋	牆壁	宮室	書屋	内城	宮殿
	○○堂	宮廷	神堂	界殿	回廊	毛棚
	門閾	楼閣	結構	重杖	檐杖	壇

漢文本『雑字』は１行10字，西夏文『雑字』は１行12字，詳細に両者を検討してみれば、差異はたしかにあるが、あまり明瞭ではない。字面からでは、同じ語を見つけにくいが，実際は同じである語がある。例えば“○○”である。西夏文『雑字』では“○堂”とあるが、実際は“灰棚”である。漢文本『雑字』には検討すべき語が２つある。ひとつは“○○”で，もうひとつは“摂集”である。“口棚”の２字は、早くも『番漢合時掌中珠』に現れているが，書きかたが珍しいため、今でも“棚”の字を誤って“柵”としている。②“○”は本来“灰”であり，『掌中珠』の作者は、“灰”の左に木偏を加えて“○”としている。この字は字典に見えない。興味深いのは、漢文本『雑字』が『掌中珠』の書きかたを完全に踏襲していることである。ただ“堂”の１字が少ないが，実際は、西夏文も２字だけで、“堂”にあたる字はなく，漢文本『雑

字』が“堂”の字を削っているのは正しいのである。では“灰棚”とはどのような意味であろうか。ひとつの答えとして，肥料用の燃やした灰を積んでおくための部屋と解せる。しかしそれが漢文本『雑字』の“正堂”の下，“挾舎”の上にあり，西夏文『雑字』では“宮殿”の下，“宮廷、神堂”の上にあり『掌中珠』では“厨庖”の上にあることを考えれば，肥料用の燃やした灰を積んでおくための部屋ではなく，気候を占うのに使う灰の部屋であることはあきらかである。“灰”は、一般の草木の灰ではなく、葭灰(かかい) である。古代では、気象学がまだ発達しておらず，古代人は葦の膜を焼いて灰として、十二律管のなかにおき，密室の状態にして、気候を占っていたのである。ある季節になると，ある律管のなかの葭灰がうごき舞い上がって，その気候になったことを示すのである。たとえば、冬至の季節になると、それにあたる黄鐘律管のなかの葭灰が舞い上がるのである。『後漢書・律暦志』に「候気の法，室を三重とし，戸を閉じ，？？　幕を引く。室内は木を案とし，毎律各一、 内低く外高く，その方位に従い、律をその上に加え，葭灰をその内端に、案暦而候之、気至れば灰動く」とある。漢文本と西夏文の『雑字』と『掌中珠』にある“○棚”とは、すなわち、このことである。この２文字の西夏語は○○で，〔栗郭〕liguo という音である。③

いまひとつの語は“攝集”である。“集”は“斉”の訛ではないかと思う。“斉、集”の中古音は似ているのである。

斉：斉に従い，開口，四等，平声，蟹攝，音 dziei④

集：緝に従い，開口，三等，入声，深攝，音 dziep

入声韻尾は、宋代の漢語の西北方音では基本的には消失し，斉と集の２字は区別が僅かであった。漢文本『雑字』の作者は“斉”を“集”に誤ったのであろう。“攝集”は家屋の名称でもなく，家屋の一部でもない。“斉”は、衣服の下部の裾である。古代は長袍を着て堂にのぼるとき，ころばぬように裾をあげて，恭しい礼を表した。『論語・郷党』に「斉（し)を攝(かか)げて堂に升(のぼ)るに，鞠躬如(きつきゅうじょ) たり」〔裾を持ち上げて堂に上がられるときは，おそれ慎んだようすである〕とある。漢文本『雑字』の作者は“攝斉”を“攝集”に誤ったのであろう。それは「庭堂」の意味である。“攝集”は漢文本『雑字』では“亭子”の下，“草舎、客庁”の上にあるので“房舎”とか“庁堂”の類以外にどのような解釈ができるだろうか。これは、おそらく、『掌中珠』の“○○”の２字をそのまま引き写したように，作者自身もわかっていなかったのであろう。昔も今も同様に誤りが、そのまま、つぎつぎとひろまることはよくあることなのである。

5)西夏文『雑字』では、「馬、駱駝、牛、羊、飛禽、野獣、昆虫爬虫」を７

部とし，合わせて 175字。一方、漢文本『雑字』は７部を「禽獣」１部とし，合計 113字。このため、西夏文『雑字』の多くの語が漢文本『雑字』にはない。たとえば、「牛、羊、馬」部に、西夏文『雑字』には“老牛、壮牛、勁牛、象牛、犂牛、牛犢”など14種があり，「羊」には“黒羊、○○羊、大○○、小○○、１歳から６歳までの羊”など12種があるのに、漢文本『雑字』にはわずか“牛羊”の２字しかない。「馬」部には、西夏文『雑字』に、“駿驥、○駿、良驥、駿馬、午馬、種馬、死馬、烏斑馬、駁紅馬、灰白馬、白蹄馬、馬駒、馬鞍”など27種，54字あるのに対し，漢文本『雑字』には、わずか、“○驥、○○、驢馬”の３種、６字しかない。また、たとえば、“鯨鯢、○○、蚊蚋、蜻○、蠅蚋、○虱”のような、禽獣類に属さないのに，漢文本『雑字』に入っているものもある。

6)穀物（斛○）部は、西夏文『雑字』には、わずかに“大麦、小麦、糜粟、蕎麦、粳米、○米、炒米、蒸米、青○、麻豆、豌豆、○豆”など14種、28字しかないが，漢文本『雑字』には、“○米、白米、糧米、折米、○米、粗米、黍米、小米、赤谷、赤豆、緑豆、大豆、○豆、紅豆、麦○、⑤麦○、⑥麦○、⑦麦○、麦面、○子、⑧清水○、百花○”など39種、80字がある。漢文本『雑字』は、西夏文『雑字』より豊富である。

7)西夏文『雑字』の「木、草、菜」部には、合計263字あり，内容豊富である。だが，漢文本『雑字』には、わずか「果子」部の78字があるだけである。「果」部には“○果、石榴、林檎、橘子、李子、榛子”があり，「瓜」部にも“越瓜、⑨春瓜、冬瓜、南瓜、回○瓜、⑩大石瓜⑪”がある。さらに野菜には“茄、笋蕨、○○、蘿卜、苦○、葱蒜”などがあり，漢方薬も「果子」部に入れられている。たとえば“○芥、○○、薄荷、蘭香、○子”などである。

8)西夏文『雑字』の「宝、絲、男服、女服」の４部には、合計 178字あり，一方、漢文本『雑字』は、４部を「衣物」部にまとめ，字数は合計 214字。内容豊富で，たとえば「絲」部で、西夏文『雑字』には、本来、13種、26字あったものが，現在では“細緯、薄絹、綾羅、繡錦、透貝、緊絲、布帛、○紗、絹、綢、彩帛、絲条”など12種、24字が残っている。漢文本『雑字』には“綾羅、紗線、匹段、金線、緊絲、透貝、透貝、川紗、○子、線○、綿貝、剋絲、絹帛、○線、○金、○線、京紗、圏紗、隔織、○羅、川錦”など21種、42字がある。ここで注目すべきことは、“川紗、錦羅、川錦”が、早くも宋代に西夏に伝わっていることである。漢文本『雑字』の「衣物」部には、装飾品、化粧品、家具雑貨類を収め，“釵子(かんざし)、○子、釧子、○子、鏡子(かがみ)、合子(はこ)、束子、箱子、籠子(かご)、篋子、櫃子、匣子”などである。こうした名称のうち，たとえば“木匣”など，あるものは、すでに西夏文『雑字』の「飲食器具」部

に収められている。

9)2種類の『雑字』をくらべた結果，漢文本『雑字』の「薬物、農田、諸匠、音楽、礼楽、顔色、論語、官位、司分、地分」などの部には豊富な資料ある。たとえば「薬物」部には合計 144種類挙げられているが，なかには西夏本土の産物ではない薬物，たとえば“龍眼、荔肢、豆蔻、天麻、桂心、烏頭、郁金、桂皮、皮○、犀角、知母、梧桐、檳榔、丁香、枳○、乳香、胡椒、厚朴、宮桂、肉桂、杜仲、貝母、○豆、沈香、陳桂皮、五味子、安息香”などは、わが国の南方、西南の各省に産するが，なかにはイラン、タイなどに産するものもある。また“安息香”(Styrax benzoin)のように、ペルシャ原産で、漢代に中国に伝来したものもある。

「農田」部には合計 104字が収められ，ごく普通の“犂○、罷磨、鉄○、○碌、○○、○刀、大斧”のほかに，“耕種、○煉、耕耨、壌地、鋤田、官渠、漢堰、渠河、溝洫、澆灌、壟培、堤塹、収刈、揚○、持碾、○○、踏○、抜○”など耕作地灌漑、収穫、脱穀、製粉などの語句もある。また“○室、○○、夫草、子税、梯○、夾耳”などのように、よくわからぬ，おそらく、当時の土語あるいは誤字・あて字であろうとおもわれるものもある。また宋代の官名，たとえば，もっぱら軍隊を統括し、教団を訓練し、盗賊を捕らえる“提轄”，その頭目である“団頭”がなぜ「農田」部に入っているのか。漢文本『雑字』の作者の誤解か，別の意図があったのか，さらに研究する価値がある。

「諸匠」部には“銀匠、鞍匠、花匠、甲匠、桶匠、泥匠、索匠、金匠、鉄匠、針匠、鏃匠、筆匠、結絲匠”及び“鞘○、○轡、傘蓋、弓箭、○金、○塑、○壘、扎抓、鋳○、結瓦、生鉄、針工、彩画、彫剋、○刀、鏃剪、結○”などがあるが，こうした職名は『天盛改旧定新律令』のなかの諸匠と比較すると，相違点がわかり，西夏の手工業を研究するのに大いに参考になる。

「音楽」部には合計74字収められ，『掌中珠』にある“琵琶、琴、箏、箜篌、管、笛、簫、笙、篳篥、七星、丈鼓、拍板”のほかに“声律、双韻、影戯、傀儡、舞○、散唱、相撲、欣悦、和衆、雅奏、合格”などの内容があり，ここから西夏では皮影、人形芝居、散唱などの演劇や雑技相撲の類が流行していたことがわかる。

「礼楽」部には“威儀、進退、礼楽、辞○、謙大、差○、約束、貢献、酬○、防備、安危、邦国、治乱、辺塞、郷党、城塞、論説、講義、感謝、賞賜、聚会、遊玩、唱○”などの語があるが、内容とあまり一致しない。“安危、邦国、治乱、辺塞、郷党、城塞”は「論語」部の“東夷、南蛮、西戎、北狄、堅固、協合”とたいした違いがない。

「顔色」部には“紫皀、蘇木、槐子、橡子、皀礬、○花、青澱、緋紅、碧緑、

淡黄、鵞黄、雄黄、雌黄、烟脂、黒緑、銅緑、縷金、貼金、新様”など37種の色があるが，必ずしも色名ではなく，作者が随意に思いついたものもあるようである。たとえば、“新様”は「新しい模様」である。『唐詩紀事』巻44王建「宮詞」に「遥索剣南新様錦、東宮先釣得魚多」とあり，『全唐詩』巻 511張口「走馬の使を送る」に「新様花文配蜀羅。同心双帯蹙金娥」とある。王建の「宮詞」にせよ，張口の「走馬の使を送る」にせよ，“新様”は色彩ではなく、四川錦の模様のことである。

「論語」部は裁判訴訟に重点がおかれている。“申陳、告状、干連、勾追、因依、罪衍、取問、分析、公松、受賄、受罰、受承、決断、徒役、投状、裁詳、入案、文状、関定、犯法”などがあり，さちに“疾病、痊○、○○、聾盲、医治、○旗、甲冑、干戈、兵戟、叛乱”などもある。“公松”は“公訟”の誤りであろう。刑事訴訟をとりあげ，辺境防備を述べ，また疾病や心身障害をとりあげ，鎧兜を述べ，内容は雑然とし配列も順序立っていない。

「官位」部は内容が豊かで項目も整然としている。“皇帝、陛下、皇后、皇子、皇母、太后、后妃、正宮、監国、太子、太師、太傅、太保、少師、少傅、少保”から“僧官、僧正、僧副、僧判、僧録、僧人、学士、秀才、文人、挙人”まで挙げられている。ここから知識分子の社会的地位が低いことがわかる。かれらは“僧官、僧人”の下，「官位」部の最下位におかれているのである。

「司分」部には政府の機関が挙げられ，“朝廷、中書、密院、経略、中興⑫、御史、殿前、提刑、提点、皇城、三司、宣徽、金刀”から“内宿、正庁、承旨、都案、案頭、司吏、都監、獄家、大棒、小杖、家禁、打拷、勒抓、駆領、箸縛、局分、勾当、点察”まで66種 132字ある。「司分」としているが、その内容は“大棒、小杖”は人を打つ刑具であり，“打拷、○抓、箸縛”はその刑である。理屈から言えば、「論語」部の刑事訴訟の内容とひとつにすべきもので、「司分」部においたのでは理に合わない。

「地分」部には，ごく普通の“霊武、保静、臨河、懐遠、定遠、定辺、甘州、粛州、鳴沙、沙州、塩州、瓜州、五源（原）、賀蘭軍”などの地名のほかに，あきらかに番語により名付けた“臥○娘、羅税火、羅○領、吃移門、骨婢井、乃来平、麻○○、光寧難”などのものがあり，史書に見えない“寧星、火子、大内、新内、三角、山人”などの地名もある。また、かの有名な“峨嵋”という地名も収められている。もし、それが、四川の峨嵋山あるいは峨嵋県でなければ，西夏の領土内の峨嵋とはどこを指すのであろうか。以上，これらはどれもわれわれの研究する価値のある問題である。

２種類の『雑字』のうち，ひとつは彫りが精緻で、字体が優美な西夏文の『雑字』の版本である。筆者がみた版本は，『同音』の新版本がほぼ同等の美

しさをもつ以外，『文海』『掌中珠』『聖立義海』『類林』『孫子』『論語』『天盛改旧新定律令』などは、どれひとつとして比べものにならない。内容の点でも充分に配慮が行きとどき，三才を綱領にして各部が密接につながり，整然としている。現存する 2,322字（標題を含まず）に書き誤りはわずか２字しかない。これに対して、漢文本『雑字』は、体裁が乱れ，内容に重複顛倒が見られ，誤字や当て字は多数ある。とても官修の啓蒙読み物とは思えず，西夏人学者の著作とも思えない。西夏人編纂による総合読み物，例えば『掌中珠』『聖立義海』『雑字』はみな三才を綱領としているのに，漢文本『雑字』にはそれが見られないし，西夏人が編んだ文書はどれも番姓を漢姓の前においてあるのに，漢文本『雑字』は漢姓を番姓の前においてある。筆者の考えでは，作者は番人ではなく，才能をもちながら、不遇をかこつ漢族の知識分子ではないかと考える。作者は天を敬わず，神も信じず，さらには官位や行政機構を蔑視し，禽獣を官位や行政機構の上に置いている。１部から20部まで天部が見られないが，反対に薬物部の字数が全書各部の最多，合計 144種,330字に及び，漢方薬に対しこのように詳しいのは、作者が漢族の医師ではないかと考えられる。この漢字本『雑字』は官修ではなく民間に流布した写本であるため，写し誤りが避けられず，誤字やあて字がかなり多いのも当然である。

〔原注〕

①史金波「西夏漢文本『雑字』初探」，『中国民族史研究』第２輯，1989年,169頁。

②同　上,182頁。“灰棚”を□□と書いているが，この字体は論文付録の「西夏漢文本『雑字』22頁」の書影に見える。

③骨勒茂才『番漢合時掌中珠』22頁

④丁声樹『古今字音対照手冊』及び李方桂修訂によるカールグレン中古漢語再構音。

⑤○：○の　，音は "弋"(yi),麦○とは、麦の殻をとり、砕いて粥にするもの。

⑥○：音は "涓"(juan),茎をいう。麦○とは食糧ではなく麦の茎をいう。漢文本『雑字』の作者は食糧と誤り、ここに入れたのであろう。

⑦○：音は“邵"(shao),米と麦を混ぜて粥に煮たものを○といい，“○”に同じ。

⑧○：音は“参"(san)，粥の意。米で作った羹をいう。

⑨越瓜：辞書には見えず，百越あるいは於越地区から西夏に伝わった瓜のことか。“回○瓜”“大石瓜”と同じように，南方伝来の瓜を指す。

⑩回○瓜：字面から意味を考えると，回鶻人が伝えた瓜となる。史金波同志は

「現在のいわゆる“哈密瓜”であろう」とするが，正しいとおもわれる。なぜなら、西夏が最盛時には、現在の新疆ウイグル自治区哈密地区まで勢力が拡張していたからである。

⑪大石瓜：大食瓜のことで，薬物部の「安息香」と同じところから伝来したものである。

⑫中興：中興府のことで，西夏の政治、経済、文化の中心，西夏の首府。呉広成『西夏書事』巻十一に「興州を府に昇(ぁ)げ，興慶と改名す」とある。最近アメリカ籍の○如萍による「興慶府と中興府及び関連問題の考証」が異議を唱えている。○氏は、西夏の文献に中興府はあるが、興慶府はないことから，興慶府と称したとするのは呉氏の憶測による断定であるとする（『中国民族史研究』第２輯所収，1989,161頁，聶鴻音訳）。漢文本『雑字』の“中興”と西夏文の記述が一致しているので，○氏の考証は正しいようだ。

⑬勾当：“総管、主管、頭監”の意で，唐宋時代に常用された官職名。西夏語では、ふつう、“都大勾当行宮三司正”のように、“都大”と連用される（詳細は李範文『西夏研究論集』,147頁）。